様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：２８００３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１０５８６

研究課題名（和文）都市部と農漁村部における地域力を活かした「近助」ケアシステムの開発

研究課題名（英文）The Development of a "Kinjo" Care System Utilizing Regional Strengths in Urban and Rural/Fishing Communities

研究代表者
安仁屋　優子（ANIYA, YUKO）

名桜大学・健康科学部・助教

研究者番号：６０７５６９９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、沖縄県の小地域における地域の特性と地域力を把握し地域特性の活用方法を明らかにすることであった。農漁村B集落の文化を基盤とした地域力を明らかにし、今後の近助ケアシステムづくりへの示唆を得るため地域行事や祭事に参加し参与観察を行った。B集落の住民は、お互いを気にかけ支援の必要な高齢者を見守り我が事としての支え合い：インフォーマル・サポートの基盤がみられた。
　さらに、120年以上の歴史を有する伝統文化“豊年祭”は、若者世代の地域への思いを育み、豊かな社会資源を有していた。以上の事からB集落は、文化的基盤に基づいた、小さな集落でも支えあい生きていける地域力があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、小地域における多世代間の絆と地縁：近助が文化的基盤から強化されていることを明らかにした。小地域におけるインフォーマル・サポートの基盤や、公民館・民生委員による支援体制は類似する他地域へのモデルと成り得ること、また地域ごとの特徴や強みを活かし発展可能な方法論を示すことができたことは、社会的意義として重要な成果である。
　本研究の成果は、地域力を活かした「近助」ケアシステムの構築に向けた実践的・理論的な知見を示すことができ、小地域の持続可能な発展に寄与する重要なものだと考える。

研究成果の概要（英文）：The study aimed to understand and utilize the unique characteristics and strengths of small communities in Okinawa Prefecture. By focusing on community B, a rural/fishing village, the researchers participated in local events and festivals to observe and gather insights for developing a "Kinjo" care system. The observations highlighted a strong foundation of informal support among the residents, who took care of each other, especially the elderly in need.

The traditional "Honen-sai" festival, with its long history, played a significant role in connecting the younger generation to the community, providing rich social resources. The study concluded that community B's cultural foundation and regional strengths enable even small communities to support each other and thrive.

研究分野：高齢者看護学　地域在宅看護学

キーワード：地域力　近助　高齢者ケア　伝統文化　小地域

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

認知症の方が住み慣れた地域で安心して暮らし続けるためには、近隣住民や自治会の支えである「近助」と、専門職および行政との協働連携による地域包括ケアシステムの構築が必要不可欠である。本研究では、この地域包括ケアシステムの構築を目指し、日常生活圏域（公民館を拠点とした字・区単位）に焦点を当て、地域との協働連携による活動を展開するために、名護市の異なる特性を持つ 2 地区（都市部：A 地区、農漁村部：B 地区）を選定した。これらの地区は、それぞれ農漁村地区と文教地区という大きな違いがあり、前回の調査では、B 地区において、認知症高齢者とその家族が在宅生活を継続するためには、地域の人々とのつながり（地域力）と専門職の存在が重要であることが明らかになった。具体的には、B 地区における住民間の親密な関係や地域情報の迅速な対応が、その地域ケアを支える要素として確認された。

本研究では、A 地区と B 地区の地域特性や地域力の違いを比較検討し、それぞれの地域の特徴を活かした取り組みは、地域包括ケアシステムの構築において無限の可能性を持つことが期待され、さらに、認知症高齢者が住み慣れた地域で穏やかに生活できるためには、介護する家族だけでなく、地域全体が認知症についての知識を持ち、存在する小地域の資源を発掘する必要があった。以上の観点から、本研究は地域特性に基づいた地域包括ケアシステムの実現に向けた実践的な取り組みを軸とし研究を行った。

本研究の意義と期待される成果としては以下の通りである。

期待される成果：２地区の各々の地域力を活かした近隣住民と世代間の「近助」を軸に地域住民が主体となり認知症理解の促進を行い、研究成果で導かれた地域力（地域の人とのつながり、専門職）を最大限に発揮できるような地域包括ケアシステムの構築

社会的・学術的にも意義：認知症高齢者が増えてくる状況で、地域での高齢者ケアや地域包括ケアシステムへのモデルの構築と応用可能性

２．研究の目的

本研究の目的は、沖縄県名護市の対照的な２地区（都市地区：A 区、農漁村地区：B 地区）における地域の特性（歴史・文化、医療・介護サービス基盤等）と地域力（社会資源、地域への愛着度等）を把握し、これまでの研究成果(地域力)を踏まえ、認知症や地域づくりに関する意識と、地域特性の活用方法を明らかにする。さらに、介入初期のアクションとして、２地区の研究協力者との調整や地域住民との関係性づくりのための認知症の理解を深めるための普及・開発を行いながら、「近助」を活かした認知症の人にやさしい地域包括ケアシステムの開発を目的とすることであった。

３．研究の方法

(1)準備期: ２地区の地域別特性として、A 市史や区史等の文献を用いて地域の歴史や伝統行事、人口構成、保健・医療・福祉・介護の基盤、産業等を把握する。
　①地域の活動と祭祀への参加：参与観察
　②質問紙調査とインタビュー
(2)介入初期～介入中期：区長を中心に、住民会議の構成メンバーとして、各組織団体等の代表および希望者を選定する。住民会議を開催し、認知症の理解を深めるための普及・啓発や認知症の人が暮らしやすい地域づくりに向けて検討を定期的（月１回）に開催し、支援体制の検討等のアクションリサーチを展開する。
(3)介入後期：アクションリサーチの評価と課題を抽出し、次回に向けた課題の解決方法を検討する。

４．研究成果

A 地区の研究成果

データ収集方法：①A 地区在住の住民 689 世帯を対象に質問紙調査を実施した。有効回答数は 141 人であった。さらに自由記述を質的分析対象とし 106 人の自由記述に「高齢者が捉えている環境（小地域）のストレングスは何か」との問いをかけ、一文一義でキーセンテンスを導き出した。次に類似したサブカテゴリーを集め、抽象度を高めサブカテゴリーを見出した。最終的に類似したサブカテゴリーを集め、カテゴリーを生成した。

②A 地区にて認知症に関する研修会を 3 回行い、認知症理解の促進・啓発活動を行った。文教地区である A 地区は勉強会に熱心な高齢者が多く、研修会の成果を実感することができた。また、お悩み相談や困難事例についてアドバイザーとして地域会議に参加した。さらに、防災マップ作りなどの運営会議に参加し、独居高齢者の地域ケアの方向性を討議した。週 1 回行われる地域の

見守り活動に参加し、地域の強み・課題についても老人会と共に活動を行った。
結果：A 地区の概要は、市の中心部に位置し、小学校、中学校、高等学校、福祉施設、介護事業所、病院、市営市場などがある。人口は約 4,000 人、高齢化率は B 区のみでは公開されておらず、A 市全体で約 20%となっている。B 区は新興住宅地が増え若い世帯が移り住み人口増加傾向にある。B 区の歴史は、1944 年に周辺地域の中心地であった旧集落 C 村が 5 区に分かれた内のひとつである。歴史は浅いが、旧集落は純農村であったため今でも 5 区合同の豊年祭（収穫を終えて神へ感謝し来年の五穀豊穣を願う節の祭り）や、地域の満願成就を祈願する火の神御願（神や祖先に対する儀礼や供養）などの伝統行事が現在も継承されている。
　A 地区における高齢者の捉える小地域の環境のストレングスとして、重要なカテゴリーが 7 つ抽出された。
【利便性のある生活環境】
“ 市街地に近く、歩いて行動ができ買い物などがしやすい ” とあるように、〈買い物が便利〉なことや、“ 学校や病院も近くにあり交通も便利である ” など〈公共施設等が近くて便利〉であることから、高齢者は住んでいる小地域を利便性のある生活環境と捉えていた。
【安心・安全な街並み】
“ 小川、散歩道、A ビーチ、山や海、足腰を鍛える場が多くあり、全体的に落ち着いた静かな住宅街である ” と語ったように、 B 区は、〈自然が身近で閑静な環境〉があることや、小さな公園が多く、学校通りは街灯があり、夏の夜は遅くまで散歩できる環境となっており、〈治安がよく安全〉な環境であり、安心・安全な街並みと捉えていた。
【子どもを育みやすい文教地区】
高齢者は、“ 小・中・高と学校が近くにあり、通学にとても恵まれている ” ことから、〈恵まれている教育環境〉であることや、“ 子供の登校時にボランティアの交通安全活動があるので安全である ” とあるように、〈安心な子育て環境〉と感じており、地域で子どもを育みやすい文教地区であると捉えていた。
【活発で豊富な活動】
B 区は〈活発な文化・スポーツ活動〉があり、“ 婦人部や老人会などが頑張っておりとても活気溢れる B 区である ”。また、“ 青年会があるのも良い ” とあるように、多世代による〈素晴らしい自治会の組織活動〉の存在を捉えていた。また B 区には、一年を通して色々な行事があり、それぞれの年代の区民が生活に潤いを感じており、〈楽しく多彩な地域活動〉が年齢を問わず開催されるなど、活発で豊富な活動が行われていると捉えていた。
【住民の拠点である公民館】
　B 区には誰からも信頼され人柄の良い区長さんの存在があり、〈区長を中心とした活発な活動〉が行われている。また、誰でも〈気軽に利用できる公民館〉であるため、〈子供たちが集まる公民館〉であること、“ 区の公民館活動も活発で活気がある ” などから、住民の拠点である公民館と捉えていた。
【多様性のあるつながり】
高齢者による安全パトロールの実施で “ B 区老人会見守り隊は警察署より活動が認められ感謝状の贈呈があった ” ほど〈結束力の強い老人会仲間〉が活動している。他にも、“ 施設の行事なども地域・近隣の方々が協力してくれて、いつもあたたかい支援がある ” のように、〈住民同士の協力体制〉があることや、“ B 区の活動に大学との連携をとり、活かしている ” などの多様性のあるつながりを捉えていた。
【根付いている地縁】
“ B 区の住民には優しさがある ” とあるように〈優しく気さくな住民風土〉が存在している。そのため、“ 地域のつながりがよい ”“ なにか困ったことがあっても、相談すると一緒に考えてアドバイスがもらえる ” など、〈声かけ・気にしてくれるつながり〉がある。また、〈若い世代との交流〉が行われており、世代別の交流だけでなく、根付いている地縁があることを捉えていた。

今後の地域包括ケアシステム構築と看護への示唆
　一般的に高齢者は、衰えていく身体的機能などをどのように支援していくのか、支えられる側として話題になることが多い。田中（2018）は、「高齢化が進む地域においても、高齢者が支えられる地域という発想ではなく、高齢者も支える地域という発想が必要となっている」と述べている。B 区の高齢者が捉えたストレングスの中には【多様性のあるつながり】として、高齢者が支える立場での社会関係の形成を捉えていた。小地域で高齢者が地域包括ケアシステムの中で支える立場となりうることが示唆された。
　介護予防の視点からは、「住民が地域でつながる」ことが、いわば心身機能や生活機能の観点で捉えてきた虚弱化や重度化の進行を遅らせる取り組みの前提だといわれている。B 区の高齢者が捉えていた【住民の拠点である公民館】などの資源を活かし、【多様性にあるつながり】と【根付いている地縁】のつながりの社会関係を強化することで、介護予防への貢献も期待できる。そのためには、看護職者として、B 区や行政（地域包括支援センター）、保健医療福祉関係機関などと連携し、B 区のストレングスを基盤にした支え合いの地域包括ケアシステムを推進していく必要がある。

B 地区の研究成果

データ収集方法：①参与観察として、集落の伝統文化の拠点（拝所など）や行事（豊年祭など）、公民館でのミニデイサービスなどの活動に参加し、地域住民(区長、書記、民生委員、福祉推進委員、青年会メンバー)、B 集落の特徴やこれまでの取り組み、高齢者の生活状況などの情報をフィールドノートに記録した。
②認知症高齢者の介護経験のある介護者から半構造化インタビューを行った。インタビュー内容は集落での生活と特徴について問いかけ、認知症の人が集落で生活できるための取り組みや現状について語ってもらい、平均 58 分であった。面接内容は許可を得て IC レコーダーで録音を行い、許可が得られなかったケースに関してはフィールドノートにメモを取ることの許可を得た。

結果：B 地区の概要は、過疎化が進んでいる北部地域に位置し、水と土と緑の豊かな集落である。総人口約 800 名、世帯数約 340 世帯、高齢者数約 260 名、高齢化率 32.5%(2018 年)である。集落内に福祉・保健・医療機関や小中学校はなく、個人商店 3 ヵ所、鮮魚店 3 ヵ所、酒造所 2 ヵ所がある。B 地区の伝統文化のほとんどが御願（ウガン）行事であり、蛙払い（アブシバレー）、稲穂祭、その他御願行事が毎月のようにある。その中で最大が「豊年祭（ほうねんさい）」で、五穀豊穣、無病息災、航海安全、世界平和を祈願する。また、集落内には伝統文化の拠点である御嶽や拝所などの史跡・文化財が数多く残されている。

B 地区の地域力として、【地縁による強いつながり】【信頼の厚い公民館・民生委員による高齢者ケア】【住民同士による我が事としての支え合い】【伝統行事で強化される多世代間のつながり】【住民総出で継承する伝統行事】５つが抽出された。この地域力は地域ケアの基盤となるものであり、特に【住民同士による我が事としての支え合い】【伝統行事で強化される多世代間のつながり】について明らかになったことを説明する。

B 地区は集落の家屋は昔ながらの平屋で、建物や塀が低いため住んでいる人の生活が見やすい構造となっている。その見やすさもあり、住民は家族が来ない一人暮らしの高齢者のお家を覗いて元気か確認することを行っていた。また、認知症の夫が自転車で出かけても、道で見かけた近所の人が電話で連絡をくれる、などの連絡機能があり、我が事として安心と安全を守る地域の目が存在していた。

小地域は親戚・兄弟が隣近所で生活していることが多く、介護を継続する上で兄弟・親戚が隣近所にいることは重要な意味を持っていた。家族が認知症や介護が必要となった場合、住民は認知症の家族に、友人がお昼を運ぶなどの協力体制があり、近所の人が夜中でも電話したら駆けつけるなどの直接的ケアが行われていた。認知症の夫が行方不明になった時も地域の人みんなで探すなど、緊急事態にも住民による臨機応変な認知症ケアが発動され、介護を我が事として相談・助言することが日常にあり、B 地区には住民同士による我が事としての支え合いがあった。

B 地区には長年続いている豊年祭があり、同世代だけでなく伝統行事を介した世代間交流がある。行事を通して先輩の苦労している背中を見てきた若者は、高齢者になった先輩達が大変な思いをしてきたことを理解しており、小地域の伝統を存続するため青年会を続けるなどの、若者世代の地域への思いと貢献があった。そのことは豊年祭の 3 日間のために里帰りをし、豊年祭は命がけでやっているくらい力をいれている、とかたっていたように、仕事など他のことよりも豊年祭での全員参加の役割分担を最優先にしていた。また、豊年祭の後継者、若手育成などを見据えて、自分の子には小学校の頃から棒術をさせるなど、豊年祭への意気込みは強かった。

B 地区の地域力をまとめると、祖父母の代から孫の代まで多世代に渡る顔なじみの関係が維持されており、【地縁による強いつながり】が基層にあった。公民館では高齢者の生活支援・介護予防や緊急時の相談場所となっており、集落の情報が集まり発信されるような役割機能を備えていた。また、公民館を活動拠点としている民生委員は、高齢者を見回り支援しており、【信頼の厚い公民館・民生委員による高齢者ケア】が実践されていた。また、兄弟・親戚が近所にいることも含め、住民同士はお互いを気にかけ支援の必要な高齢者を見守り、特に認知症高齢者と家族に対しての直接的・間接的な支援を行い、【住民同士による我が事としての支え合い】によるインフォーマル・サポートの基盤がみられた。さらに、120 年以上の歴史を有し、最も大事にされている伝統文化“豊年祭”は若者世代の地域への思いを育み、【伝統行事で強化される多世代間のつながり】を介して【住民総出で継承する伝統行事】という豊かな社会資源を有していた。

都市部と農漁村地域をフィールドとし、研究者が地域に入りこみ、強みと課題抽出、さらに課題解決に向けてデータ収集を行った。あくまで主体は地域住民であることを念頭におき研究者と住民が一体感を持って実践できるのがアクションリサーチの醍醐味である。２つの小地域から得られた結果から共通して言えることは、地域包括ケアシステム構築の糸口は、既存にある地域の宝物（つよみ）の発掘とその発展可能性をどう考えるかであること。地域住民が主体となって課題に向かえるよう住民エンパワメントを支えること。沖縄の独特な文化は人々のつながり、多世代間の絆を強める役割があることである。地域ケアは一律一様ではなく、その地域に根ざした方法でなければ持続可能とは言えない。実践方法は地域性を考慮することが重要であること、文化が基盤になっていることを地域ケアの入口だと理解することで、今回の研究成果は、他地域への応用可能性として大きく期待できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 安仁屋優子　佐久川政吉　下地幸子	４．巻 第25巻
２．論文標題 高齢者がとらえる小地域の環境のストレングス	５．発行年 2021年
３．雑誌名 老年看護学	６．最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 安仁屋優子、佐久川政吉、下地幸子	４．巻 第11巻
２．論文標題 農漁村部における伝統文化を基盤とした地域力 －沖縄県B集落の住民と高齢者の支え合いの事例から－	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文化看護学会誌	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 安仁屋優子
２．発表標題 県外移住者の多い沖縄県北部地区における育児支援サークル活動の現状と課題（第１報）－母親世代の参加のきっかけ、悩み事、今後の希望－
３．学会等名 日本ルーラルナーシング学会第17回学術集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 安仁屋優子
２．発表標題 沖縄県北部地域Ｂ区の住民が認知症になったら望むこと
３．学会等名 日本ルーラルナーシング学会第16回学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名
安仁屋優子、佐久川政吉、下地幸子

２．発表標題
認知症の人にやさしい地域包括ケアシステム開発のための基礎調査―沖縄県北部B区の地域特徴と強み・課題

３．学会等名
第14回　日本ルーラルナーシング学会(宮古)

４．発表年
2019年

１．発表者名
安仁屋優子、下地幸子、佐久川政吉

２．発表標題
認知症高齢者が住み慣れた農漁村地区で暮らし続けられる地域力

３．学会等名
日本老年看護学会　第23回学術集会

４．発表年
2018年

１．発表者名
安仁屋優子、佐久川政吉、下地幸子

２．発表標題
認知症の人にやさしい地域包括ケアシステム開発のための強みと課題の把握 －沖縄県北部地域Ｂ区における１年目の活動から－

３．学会等名
日本ルーラルナーシング学会学術集会

４．発表年
2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	卯田　卓矢 (Uda Takuya) (20780159)	名桜大学・国際学部・上級准教授 (28003)	

6．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	下地　幸子（シモジユキコ） (Shimoji Yukiko) (50804639)	名桜大学・健康科学部・准教授 (28003)	
研究分担者	島田　友子 (Shimada Tomoko) (80196485)	名桜大学・健康科学部・教授 (28003)	
研究分担者	佐久川　政吉 (Sakugawa Masayoshi) (80326503)	沖縄県立看護大学・看護学部・教授 (28002)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関